立圃龍集

へ利5
1948

思ひ子

發句眼目三減の連哥よりいで
まかし心詞のきれたるを眺望
いふなり先發句ハ四季を紀く
切字の重下を第一とし或ハ
此面白さを底ふかくし詞のさ
まもるとのにあらし又ハかくさ
まさん深く称ゝ色詞の清く
きよらかならはふとこゆるを
ふくへし總ハ發句ハおしなく附
所をとしふして音くなる韻
字をとをしふともはたるの外三
八国立にも立をとけるは新越

へ 5
1995
48

すり出ゝらるやうにいたさるゝやうよ
し先達連哥の習ひろく
以て及ばねまでも先哲人
法を破りて異風のことなれば
そのうちに文字をあまし
句引もなきの是非なきまくり
流とそうして上手の功をのく
そけとある事は京田舎の座に
職と仕御まうるとも見へぬ
なまじゐに連哥師等と加
つきてこゝろ有ひ組して
ことばを費し俳諧は歌やう
の趣もしひへて句を関付けし

る付打越とりさゝまへなる事也
と云事は哥歌師さへくわしくは
先とそこら俳諧師の俳諧の上
ようを知て第一に座するは大事
なりさて連哥の付合句作
其の仕立てをはかり行を
知りて善悪をしつむ俳職の
連哥としてよまれて事あれ
それ外の先よりも学者にしてし
先古き連哥と自然の文字
細なる事也俳諧も古き句
付同士の差別あり出来
まへあてハいかにもおもしろき

ところ功もなくとうかんなりしなき
とふもゆきあるときのえやをも
羽文字もあひくさき世話をする
とすれは面白くと相しくとゆく
れもと文字をたしなき儀しき
人の翁なく人生精姓情又ハ雅
山乃風京四季鳥獣の中に
事のこともとり実より趣あるまで
具ありまするか今それをにしたる
俳ことく職よ似るる俳色わからぬ
出事なりきさひくにまくれ
馬とひ舟子乃まゆとさくを
するさるへきも句作をも守るく

これの頼んでてまくも推せし
なくハ聊しきまぬへし連歌
の発句とこもあ八諸しるとたよ
き人乃哥まよと世よ面白人もあ
京の人まんなりちふと以上ハ
なふしょ第一なもまゆらむ
とらもなんとつけくなんの
ん翁とらく守さまかへしぬ白
と仕をなよハ梅ふくへてふ
もありまく梅なひめくもとを
ありこの梅とらくなてもとを
なものこゝれるやうなまこと
なく心祇とさるちいるとたく

へ参りの地とたちゐるをあるか
座しえたへとよせけしあ
春迎にいふも其祝ひとこゑん
ていひといふても其け山稽独とへ
乃句まで定むいおやまりも其
へ字れた自句と書る也かり
ららぬくとうく字なるる午

春たけハ雛段乃みとらけ其の春
元日や日本よむかふ文字こそ
来る春や斗作のくりてん
澄鱗気なるや庭さ御代の春

と川春にいおあひいらよ稿よ代日
世きりやよきさくとそふの春

旦文

梅さくかとこそを能とうさきむ

春林の旦文

名ハ新鶯梅いたりしと解同小
かくめそよめしとたいむ萩乃つる

春秋四季 是ハおかむやし

生乃名は志う流てみよ西何の言
庭の詩賦をいとしもし花乃春

旦文 同付句

はよひしと友ゃ小鴨とそとひら
みかその気流乃久陵

漢和 日入韻 是ハ回春ヲ强起也

幾回春潤色

根芽草乃ゆめやまかくれ
本文を對して付る事

仝

風ノ手ニ入ル持扇

帳乃まくりふりぬ数乃花

仝

文月可ニ申シ入ル

萼花下されまおりるまま

仝

光儀宸始テ雪

萼志乃袖をかふるまま

付句之術

あらそて花や梢乃さる哉

見て行くふよるふ表の百鳥

是ハ風乃つるふさけたるふ

らせまる術也

肥たるを瘦たるを擬邊

巖ハ山乃日より日れとて

子刻の鶯まやままべき

お驚やあるし当を思ひあく

我子より似るふ孫ハらうめき

是目より乃粉也

一 徒もうハうきひをまよきを
縁組ハ家井比翼と同して
末に行と続てちにならせうらし
天神とこそ世にあふくなれ
第一ハ国常立尊にて
此世乃天神と七代の嘗
すとりふをりこれハ親類
此中にも夫婦の縁をむ
すひる稀なるへし
他人と他人中ハよく見西
濃りぬ縁よ夫婦乃定まて

此付やう自然りとわきまへ
ちしおもとおひ志るへし
をさこ親類の中にも夫
婦と成るんよりも他人
乃縁ハふかきにかしある道
はりつらぬハ自ふそよるへき
志めさる古則の教とふまて
是ハ家ま此をりよる長縁の
出て前婚縁のまでなりいつま
も時代にかいりまてこそ長久
ひとけまハ先とも世にと

凡の趣をとらへひとりて書
付る也
只ふり事に小きあと事二
色といへとも心ひとつなれあ
花見て出ひれまするへき事
多りて心とい古りの方に至て
あやまち出る也さハ云とらき
事ハ心のまゝにて悪きす
公此出くして作るれハ口は以
一の外りて出るえをおしき
と云ふらしと出く人もあるに

や物毎に慢心を持こせり爰て
以まくさらく感さ俳諧とは
只あやまち事も先まし付ま
と我も人と口くをもて世よく
とりまきりおくみの俳諧
の数句も付句と始とり約
の高く候はやはりよろしめ
くしきおりひさらへあさ事
とたくさこひるとて下手なるを
おりたく人ハ手とりけり人の一字に
ハ非ずて見ゆ無き数を定めて

志くよりぬるのミから
ハりきえされとろりぬとりさ
いかきよふくとあらせるもある
へし一字つとつ称くをよ
きハ能書とて称する手
とみしう家志りと取りく
ゐさまとはえんりゐよ志とけ
なさいさまんとまさんまいらせ候
かしく

寛文八年
仲秋吉辰

立圃

中野庄太郎 左刊